

**授業概要**

日本はジェンダーギャップ指数(2020)が153か国中121位であり、ジェンダーギャップが大きい国(男女平等が進んでいない国)となっている。特に経済と政治の分野で男女のギャップが大きく、その差を埋めることは政策的な課題ともなっている。なぜ女性が経済や政治の場で活躍できないのか。男性も女性もセクシュアル・マイノリティも、平等にのびやかに活躍できる社会とはどのような社会なのか、本授業ではさまざまな観点から考えていく。なお、担当教員は出版社(株式会社徳間書店)に編集者として16年間勤務した経験を持ち、ジェンダーにかかわる書籍等も数多く手がけた。本講義においても、メディアとジェンダー、企業社会とジェンダー、労働とケア役割、キャリアパターンとライフコース等のテーマについて、自らの職務経験と社会経験を生かした形で講じていく。

**授業計画**

第1回	「ジェンダー」って何?~ジェンダー概念について学ぶ
第2回	「女性学」と「男性学」の観点から
第3回	性と性差の多様性
第4回	LGBTI/SOGI
第5回	教育とジェンダー①
第6回	教育とジェンダー②
第7回	メディアとジェンダー①
第8回	メディアとジェンダー②
第9回	中間のまとめと課題
第10回	企業社会とジェンダー
第11回	労働とケア役割
第12回	キャリアパターンとライフコース
第13回	職場とハラスメント
第14回	デートDVについて考える
第15回	社会政策とジェンダー
第16回	定期試験

**到達目標**

目には見えにくい「性差の枠組み」を見抜く力(=ジェンダーの視点)を獲得することが、まずは目標となる。そのうえで、なぜ、そのような「枠組み」が社会に存在しているのか、それが人々の生き方にどのような影響を与えているのか、自分で考察できる力を養うことが到達目標である。

**履修上の注意**

本授業は毎回、出席をとる。出席要件を満たさない場合、成績評価の対象とならない。継続して受講し続ける意志と自信がない学生は、受講を控えること。

**予習復習**

「ジェンダー学」は単に知識として学ぶものではなく、つねに、現実の社会事象と関連づけながら、自らが「問い」を発し、それについて考える態度が必要となる。よって日頃から新聞を読む、報道番組を見るなど、社会に関心をもつ態度が求められる。そうした生きた「予習・復習」が必須であることを理解したうえで履修すること。

**評価方法**

定期試験試験(60%)と授業時の課題(40%)で判断する。

**テキスト**

- 教科書名：はじめてのジェンダー論
- 著者名：加藤秀一
- 出版社名：有斐閣
- 出版年(ISBN)：2017年(本体1800円)